

アスピリン

アスピリン

市川治療室 No.116/2000.11

アスピリン新効能承認・・・狭心症・脳梗塞再発予防

開発から百年の歴史を持つ解熱鎮痛剤「アスピリン」が、狭心症や脳梗塞などの再発を 予防する薬として生まれ変わるようになった。

血が固まるのを防ぐ効果があることを厚生省が正式に認めたため、 今年中にも新効能に医療保険が適応される見通しだ。

欧米ではアスピリンの血栓抑制効果を確かめる臨床試験が行われ、 米国では2年前に効能追加を認めた。

上記は10月初旬の読売新聞に掲載された記事の一部です。

新聞記事には新効能承認とありますが、その効能は古くから知られているものです。

アスピリンは今から100年以上前の1897年のドイツのバイエル社で誕生しました。

「アメリカでは成人の4分の1がアスピリンを常用し、4分の3が有事の際にこれを使う」
「イギリスでは家庭医はアスピリン以外の薬は投与しない」とされる位お馴染みの薬です。

1956年、ロサンゼルス医師ローレンス・クラブン氏は次の様に、アスピリンの血栓予防効果を発表しています。

『アスピリンを8000人の患者に投与し続けて1人も心筋梗塞や狭心症で死亡させなかった』

1988年のニューイングランド医学雑誌にはアスピリンについて以下の様な発表がありました。

『40歳以上の健康な医師22000人を2グループにわけ、
Aグループの11000人にはアスピリンを隔日、Bグループにはコーンスターチのプラシーボ（偽薬）を摂取

5年後、Bグループでは心臓発作の起きた: 189人中18人が死亡。
Aグループ（アスピリン摂取グループ）では104人の発作中、死亡は5人』

1991年にはアメリカで看護婦87000人を対象として、6年間調査した結果が発表されました。

『アスピリンを摂取しない人は摂取する人より心筋梗塞の初発率、死亡率が30%高かった』

アスピリンはどの様にして「血液が固まるのを防ぐ」のでしょうか。

哺乳動物はプロスタグランディンといわれるホルモンを各細胞で生産します。

プロスタグランディン・・・前立腺や精液に子宮や腸の筋肉を収縮させ血圧を下げる物質を
ゴールドブラッド（イギリス・1933）、フォンオイラー（スウェーデン・1934）が発見し

フォンオイラーがプロスタグランディンと命名した。名前の由来はプロスタグランド（前立腺）

血が固まる = 血小板の凝集（血液凝固）にはプロスタグランディンがかかわっています。

アスピリンは血小板凝集を促すプロスタグランディン（トロンボキサンA2）を抑える働きがあるため

血液凝固（狭心症・脳梗塞）を防いでくれます。

アスピリンを摂取した小児がウイルスに感染していると「ライ症候群」を誘発することがあります。

また、喘息患者がアスピリンを摂取した場合には「喘息発作」を誘発することがあります。

副作用の最も少ない薬 = アスピリンであっても上記の両者には勧められません。

また、胃の弱い人（胃粘膜が弱い人＝日本人に多い）には刺激がある場合もあります。

ただ胃粘膜が丈夫であれば問題ありません。

アスピリンの副作用としては、耳鳴り・聴力低下などが報告されています。

アスピリンは血液凝固の予防（狭心症・脳梗塞再発予防）の他に
大腸ガンの発生抑制や乳ガンの骨転移予防の作用にも有効といわれています。

トロンボキサンA2を抑えるために必要なアスピリンの一日量は60～80mg（一錠の6分の1）だそうです。
